偶然と主体性の両立

内田智士

はじめに

本稿では、「運」に関する心理学的・認知科学的研究を参照しながら、主体的な認知と行動との関係を考える。特に、心理や認知についての研究者であるリチャード・ワイズマンによるよく知られた研究をはじめとして、主観的な幸運感覚が認知や行動にどのような影響を及ぼしうるのかを見る。

一般に運というと、本人の努力や行動、能力などとは別に、外部から偶然にもたらされるものと捉えられる。しかし、このような「客観的な運」の研究とは別に、自分は運がいいと主観的に感じることの意味を調べる研究がある。例えばワイズマンらの研究は、自分は幸運だと感じること自体が、その人の認知特性や行動に影響を与えうることを示している。

それら主観的幸運感覚に関する研究によって、自分は運がいいと感じている人は、例えば自分の置かれた環境に存在する有用な情報に気づきやすい傾向を示すことが知られている。また、そのような気づきを実際の行動に

つなげることで、新たな出会いやチャンスを得やすくなる場合もあるだろう。これは、運が完全に外部から与えられる偶然ではなく、本人の注意の向け方や環境への開かれ方、行動の仕方などによって形づくられる側面がある可能性を示している。

他方で、「自分は運がいい」と単純に考えることが常によい結果をもたらすわけではない。運を、自分ではどうすることもできない外部の力として捉えるとすると、それは努力や判断、もっというと「自由意志」を無意味なものとして扱うことにつながるだろう。また、「自分は運がいいから悪い結果は起こらないだろう」と考えることは、本来、存在するリスクを過小評価し、非道徳的な行動をもたらす可能性がある。この意味で、主観的な運はポジティブに働く場合と、そうでない場合の両方がある。

そこで本稿では、この二つの側面について見ながら、偶然と主体性を両立することの意義について考察する。

一、主観的幸運と認知特性

1. 主観的運と気づきやすさに関する古典的研究

自分の人生を振り返ったときに、「あのとき、なぜあのようなラッキーなことが起こったのだろうか」と感じることがある。少なくとも筆者自身には、そのようなことがよくあり、例えば何らかの文章を書かなくてはならず、締め切りが迫っているときに、自分がなんとなくテーマにしようと考えていた事柄と大いに関係する情報に、「偶然に」出会うことがよくある。このような現象があったときに、何も感じずに通り過ぎるか、それが幸運な出来事であると意識し、それが積み重なることで「自分は運がいいなあ」と感じるかで、人生が変わりうるだろ